

中西モナさんが繋ぐ 被災地 Hot Line

vol.11

育児中の女性たちが集まって、子どもと一緒に遊んだり、ときにはひとりになるための時間を持つのは何よりのリフレッシュです。岩手県陸前高田市には、そんな女性のニーズに応える施設がママたちの手で作られたそうです。IBC岩手放送の奥村奈穂美アナウンサーが紹介してくれます。

取材協力／三尋木志保
デザイン／Permanent Yellow Orange



中西モナ

76年広島県出身。朝日放送アナウンサーを経て、フリーに。'11年英国国立ウェールズ大学経営大学院でMBAを取得。'12年7月に長女を出産。「オンナの元氣塾」主宰。阪神・淡路大震災では取材活動も経験。

中西モナさんから
IBC岩手放送
奥村奈穂美さんへ
仮設に住みながら
子育てをするママに
安らげる時間や場所は
ありますか？



奥村奈穂美

'81年滋賀県出身。'04年IBC岩手放送入社。震災当時は妊娠5カ月。'11年8月、長男を出産。現在はラジオ「新米ママの井戸端会議」「ワイドステーション」「イブニングジャーナル」、テレビ「じゃじゃTV」に出演中。

奥村奈穂美さんから
中西モナさんへ
被災後、孤独感を感じている
ママ同士が助け合っています

現地ママ
アナウンサーが
VERY読者に
伝えたいこと

IBC岩手放送 奥村奈穂美さま

この冬は、一段と寒くなるとのことですが……岩手の冬は厳しいですね。仮設住宅にお住まいの方もまだまだいらっしゃる中、厳しい冷え込みが皆さんを困らせていないか心配しています。寒さもさることながら、仮設住宅や仮住まいの暮らしが長くなると、なかなか一人一人がプライベートな空間を確保するというのは難しいことのように思います。子育てをしていると、どんなに子どもが可愛くても、ひとりになってホッとひと息つく時間というのは欲しくなるもの。そうした時間を捻出することが叶わない状況が長く続くのは、ママたちにとってとても過酷です。命があっただけ、助かっただけ、住むところがあるだけいいじゃないかというのは、当事者ではないから言えるのかもしれませんが。全くプライベートが確保されない空間に、決して短くはない期間、

身を置くというのは想像以上に辛いことのように思います。短い時間でも、ママたちがホッとできる場所というのはあるのでしょうか？ また、それに代わる救済策があるのでしょうか？ 子どもが生まれて感じましたが、女性が子育てできるのは「当たり前」「当然のこと」のように考えておられる方が少なからずいらっしゃいます。でもそんなことはありません。子育てが苦手だなと感じるママだっているだろうし、子育ての方法なんて誰も教えてくれず、少なくとも私は暗闇で手探りするような状態で始まりました。社会は子育てしている女性たち（もちろん女性に限りませんが）に、もっと優しくなってほしいなあと思う毎日です。

中西モナ

奥村さんのお手紙を読んで……

子どもの世話にはママひとりでできたとしても、そこには子育てに関する不安や悩みが必ずついてくるもの。そんなところまでひとりで解決しようとしたら、ママたちはバクシちやいますよね。まきぼっこの取り組みのように、ママたちが支え合う構図は、もしかしたらとても理想的なのかもしれません。ママの苦勞って、ママたちがいちばんよくわかってますものね！ ママだって、たまにはひとりになりたいんです。うん、私も(笑)。

中西モナさま

こんにちは。IBC岩手放送アナウンサーの奥村奈穂美です。先日、専業主婦で子育てをしている友人が「子どもがお昼寝しているときが唯一の休憩タイム」と話していました。その休憩タイムも子どものそばを離れられないですし、完全に自由とは言い難いですよ。

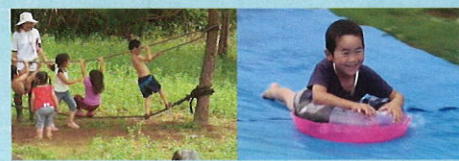
これが沿岸被災地であつたら……と想像すると、やはりひとりの時間や空間を欲している人はさらに多いと思います。住まい、お気に入りのお店、仕事。安らいだり集中したり、そんな場所や時間も震災に奪われたからです。

東日本大震災で被災したママやパパ、そして子どもたちを育てる保護者の相談を受け付ける相談ダイヤル「ママパパラインいわて」には、被災地のママから「ご近所の目が気になる」「仮設住宅の壁が薄く、自分の声や子どもの声が迷惑にならないかと家でも落ち着けない」などの声が寄せられていると伺いま

した。少しの時間でいいと思うんです。ちょっと心を落ち着ける時間、気分転換ができる空間。「贅沢だ」「子育てや人付き合いから逃げている」と罪悪感を抱く方がいるかもしれませんが、その時間を取ることで家族や周囲の人と再び明るく向き合えるなら、ひとりの時間はとても大切ですよ。

陸前高田市に「冒険遊び場まきぼっこ」という施設があります。ここは、地元のママたちが助成金で自分たちに必要な施設を作ろうと企画し、'12年7月に誕生した自然と手作りの遊具で子どもたちが思い切り遊べる施設。ママたちの集いの場にもなっています。事務所として、敷地内には「まきぼっこハウス」というプレハブがあります。ここは震災でプライベートな空間を失い苦しむママを助けるシェルターの役割も果たすため、宿泊ができるようになっていました。まきぼっこ代表の小出あゆみさんには、仮設住宅やみなし仮設に住むママから「震災後同居することになった家族や、慣れないご近所の方の言葉に傷ついた」といった悩みが寄せられたと言います。もし気持ちが追い込まれてしまったママがいるなら、駆け込み寺として「居場所」を用意してあげたいと、このシェルターを作ったそうです。被災地のママたちが手を

取り合い、支え合つてこのような場所が存在しています。今、必要としている支援を自分たちで作ら出していこうとする姿は、力強く前向きで、助け合いの大



切さを身をもって知る“母親、だからこそだと感じます。「冒険遊び場まきぼっこ」には笑顔いっぱい元気に遊ぶ子どもたち、そして子どもを見守りながらおしゃべりに花を咲かせるママやパパがいました。そんな景色を有り難いと思うようになったのは、震災で「当たりの毎日が奇跡」だと知ったからです。中西さんの言葉通り、「当たり前」なんてないですよ。ひとりでホッとできる空間も、子どもたちが遊ぶ空間も、「あつて当たり前」「自分で見つけて当たり前」で、なかなか被災地には作れない中、「冒険遊び場まきぼっこ」は被災地のママたちが互いを思いやって作りました。「当たり前」の気持ちを捨てて被災地の声に耳を傾け、私たちも思いやりの輪に参加したいものです。

奥村奈穂美

